

成人看護学演習におけるOSCEの現状と課題

村田和子* 福田和美*

Current Status and Issues of OSCE in Adult Care Nursing Education

Kazuko MURATA Kazumi FUKUDA

要 旨

本研究の目的は、成人看護学演習後の客観的臨床能力試験（OSCE）の評価を行い、現状と課題を明らかにすることである。2022年度成人看護学演習においてOSCEを受験した3年次生89名にWebでの自記式質問紙調査を依頼し、回答があった53名（回収率59.6%）を分析対象とした。分析の結果、学生は事前に自己学習、技術練習を行って受験に臨み、事前練習と受験による成果を自覚していた。OSCE受験後の学生の認識として【自己課題の明確化】【看護技術の修得と学習意欲の向上】【状況に即した看護実践の難しさ】【事前練習および受験の成果】【臨地実習における看護実践の有用性】の5つが抽出された。OSCEの課題は学生のOSCEに対する理解を深めること、十分なフィードバックの時間を確保すること、教員評価と合わせた評価の検討であった。今後、成人看護学演習において看護実践能力の強化に向けたシミュレーション教育の内容を充実することの必要性が示唆された。

キーワード：OSCE（客観的臨床能力試験）、看護基礎教育、成人看護学、看護学生、看護実践能力

緒 言

少子高齢社会や疾病構造の変化により、社会においては看護職に対するニーズや期待が高く、看護職には多様な看護技術と専門的知識とともに高度な看護実践能力が求められている¹⁾。看護学教育の在り方に関する検討会²⁾において看護実践能力の育成を充実させることの必要性が指摘されて以降、看護系の教育機関においては、臨床実践能力を客観的に評価する客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：以下OSCE）を導入する教育機関が増えている。OSCEはペーパーテスト等で測定することのできない技能等の精神運動領域や態度・習慣などの情意領域を評価し、学生の能力を査定する方法として有用とされている³⁾。看護基礎教育におけるOSCEの成果は、OSCEを受けることにより、既習の知識をどのように活かすべきか考える機会になること⁴⁾、自己の技術の振り返りや新たな課題の明確化⁵⁻⁸⁾、臨床に近い状況でOSCEを受けることで自信が持て、獲得した技術を臨地実習で役立てるとい

実践の場での効果も見られている^{9,10)}。そのため、看護実践能力および看護技術の評価^{4,10,11)}や学生が自己の看護技術の修得レベルを自覚する機会¹²⁾としてOSCEの導入を検討している教育機関もある⁶⁾。しかし、OSCEを実施する上での課題として、OSCE時の課題設定^{6,13)}、自主練習環境の整備^{14,15)}や模擬患者の効果的な導入¹⁵⁾、教員の情緒的支援や効果的なフィードバック⁹⁾が挙げられている。また、わが国の看護系大学のOSCEの特徴として、OSCE導入の目的、OSCEの対象者、導入領域、具体的な運用の仕方、設定課題、評価およびフィードバックが各大学で異なっている⁶⁾。

A大学では3年次の各論実習前に、専門領域の看護実践能力を強化するために看護学演習が配置されている。成人看護学演習Ⅱでは、事例患者の状況に応じた看護技術の選択とその根拠を明確にし、シミュレーション教育を用いて安全・安楽な看護実践方法の修得を目指している。そして、演習における看護実践力の評価として2019年度より看護技術試験を

* 福岡県立大学看護学部
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395
福岡県立大学看護学部
村田和子
E-mail: murata-k@fukuoka-pu.ac.jp

OSCEと位置付けて実施している。しかし、OSCEを導入して3年が経過するが、OSCEの準備、実施、フィードバックの一連の運用に関しては教員の主観的評価のみであり、学生からの客観的評価は行っておらず評価は十分とはいえない。看護基礎教育において看護実践能力の育成が求められていること²⁾や成人看護学演習の質の向上のためにも、現在行っているOSCE運営に学生の客観的評価も取り入れ、教育内容の改善を行う必要がある。本研究は、A大学看護学部3年次生の成人看護学演習Ⅱで実施しているOSCEの評価を行い、現状と課題を明らかにすることを目的とする。本研究は効果的なOSCEの運営や学生の看護実践力を強化するための教育方法の基礎的資料になり、今後の教育内容の充実に貢献できると考える。

方 法

1. 研究デザイン

自記式質問紙による調査研究

2. 研究対象

A大学看護学部の2022年度成人看護学演習ⅡにおいてOSCEを受験した3年次生

3. データ収集期間

令和4年9月～11月

4. 成人看護学演習ⅡにおけるOSCEの概要

1) 成人看護学演習ⅡにおけるOSCEの位置づけ

A大学の成人看護学演習Ⅱでは、成人看護学演習Ⅰに行う看護過程の展開における事例患者の援助について、シミュレーションを通して安全で安楽な実践方法と、看護技術を実践する場合の患者への倫理的配慮について学び、その中で修得する技術の評価を行うためにOSCEを実施している。

2) OSCEの設定課題

2022年度のOSCEは3つの設定課題があり、学生はいずれかを受験した。

(設定課題)

- ① 血糖測定：低血糖症状がみられている患者の対応
- ② 術後観察：術後3日目に呼吸困難を訴えている患者の観察と対応
- ③ 術後離床：術後1日目の初回歩行時の援助

3) オリエンテーションからOSCE受験まで

成人看護学演習の初回時にOSCEのオリエンテーションを行い、OSCEの1週間前に個々の学生が実施する設定課題を提示した。OSCE前日までの期間はいつでも学生が自主的に技術練習を行える環境を整えた。

4) OSCE受験について

患者の状況と学生の課題を記載したOSCE課題文はOSCE直前に提示し、5分間課題を確認する時間を設けた。1名の学生につき7分間の実施時間を設け、終了後にOSCEを担当した教員が学生の実践に対するフィードバックを行った。術後観察と血糖測定はシミュレータを用い、術後離床は教員が模擬患者役を行った。学生の声掛けに対する応答は術後観察と血糖測定は担当教員が行い、予測される質問に対するマニュアルを作成して臨んだ。

5. データ収集

OSCEが終了し、成人看護学演習の成績交付後に無記名の自記式質問紙調査を実施した。設問内容は先行研究^{4, 5, 9, 11, 13, 16)}をもとに研究者らで作成した。設問内容は、Ⅰ. OSCEを受けるにあたっての取り組み状況に関するもの(準備性、主体性)、Ⅱ. OSCEを受ける姿勢(身だしなみ、態度)、Ⅲ. OSCEの実施に関するもの、Ⅳ. OSCEを振り返り考えたこと、思ったことの4項目で構成した。

(設問内容)

Ⅰ. OSCEを受けるにあたっての取り組み状況について

- ① 授業の復習や自己学習などの事前学習を行って、試験に臨んだ
- ② OSCEに向けて教員に技術指導やアドバイスを求めた
- ③ OSCEに向けて技術練習をしましたか
- ④ Ⅰ-③で「練習した」と回答した方は、練習した回数をそれぞれ記入してください
- ⑤ Ⅰ-③で「練習した」と回答した方は、どのくらい練習しましたか
- ⑥ Ⅰ-③で「練習しなかった」と回答した方は、その理由を選んでください

Ⅱ. OSCEを受ける姿勢について

- ① 身だしなみ(ユニフォーム、髪、爪、アクセサリーなど)を整えることができた
- ② 真剣な態度で取り組むことができた

Ⅲ. OSCEの受験について

- ① OSCEの受験は緊張した
- ② 該当した技術を正確に行うことができた
- ③ 患者さんの安全・安楽に考慮することができた
- ④ 患者さんが理解しやすい言葉で説明ができた
- ⑤ 患者さんに対して援助について説明し、同意を得ることができた
- ⑥ OSCEの課題は難しかった
- ⑦ 試験時間は適切だった
- ⑧ 教員からのフィードバックは参考になった
- ⑨ OSCEを受けて自己の課題が見つかった
- ⑩ OSCEを受けたことは今後の学習や実習に役立ちそうだ
- ⑪ OSCEのオリエンテーションから受験後までを振り返り、OSCEの目標を達成できた

Ⅳ. OSCEを受けて、考えたこと、思ったことを自由に記述してください

設問のⅠ. ①～②、Ⅱ、Ⅲに関しては、「①非常に当てはまる、②かなり当てはまる、③あまり当てはまらない、④ほとんど当てはまらない」で回答してもらった。設問Ⅰ. ③は「練習した、練習しなかった」を選択してもらい、設問Ⅰ. ④は数値を入力してもらった。設問Ⅰ. ⑤は「①1時間未満、②1時間以上（2時間未満）、③2時間以上（3時間未満）、④3時間以上」で回答してもらい、設問Ⅰ. ⑥は「①時間の確保ができなかった、②場所の確保ができなかった、③試験までの時間が短かった、④練習は必要ないと思った、⑤その他」で回答してもらった。Ⅳは自由記述とした。質問紙はGoogleフォームを用いたWeb回答とし、回答の送信をもって研究参加への同意とした。

6. 分析方法

- 1) 質問紙調査に関しては単純集計を行った。
- 2) 自由記述の内容については記述内容の意味内容を損ねないようにコード化した。
- 3) コードの類似性と相違性に基づいて抽象度を上げてサブカテゴリ化した。
- 4) サブカテゴリ同士の関連性を熟考し、共通点をまとめカテゴリを導き出し、カテゴリ化を行った後、記述内容との乖離がないかの確認を行った。分析においては研究者間で繰り返し検討を行い、

データの妥当性を確保した。

7. 倫理的配慮

本研究は福岡県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号2022-3）。研究対象者が所属する学部管理者に対して、研究の趣旨、研究方法、倫理的配慮等を記載した文書をもって、施設における研究対象者募集のチラシの掲示の承諾を得た。研究対象者に対して、研究への協力は自由意志であり研究に協力しないことで不利益を被らないことを説明した。また、科目の成績交付後にデータを収集した。質問紙への回答は研究者が不在の場所で行われるよう配慮し、回答の送信をもって研究参加への同意とした。

結 果

A大学看護学部の2022年度成人看護学演習におけるOSCEを受けた3年次生89名のうち、回答があった53名（回収率59.6%）を分析対象とした。

1. OSCE受験後の質問紙調査の結果

1) OSCE受験にあたっての取り組み状況

「授業の復習や自己学習などの事前学習を行った」については「非常に当てはまる」24名（45.3%）、「かなり当てはまる」29名（54.7%）で、全員が授業の復習や自己学習を行って試験に臨んでいた。「OSCEに向けて教員に技術指導やアドバイスを求めた」は「非常に当てはまる」11名（20.8%）、「かなり当てはまる」22名（41.5%）で、6割の学生が自ら教員に技術指導やアドバイスを求めて試験に臨んでいた（表1）。

「受験に向けての技術練習」について、「練習した」と回答した者は53名（100%）であり、全員が技術練習を行い、OSCEに臨んでいた。練習した技術項目の回数を図1に、技術練習の時間を図2に示す。各技術項目の平均練習回数は、血糖測定3回、術後観察2.9回、術後離床2回であり、全体では2.7回であった。練習時間は「1時間未満」8名（15.1%）、「1時間以上2時間未満」26名（49.1%）、「2時間以上3時間未満」9名（17%）、「3時間以上」10名（18.9%）であった。

表1 OSCEを受けるにあたっての取り組み状況

n=53 (%)

項 目	非常に 当てはまる	かなり 当てはまる	あまり当て はまらない	ほとんど当て はまらない	計
●OSCEを受けるにあたっての取り組み状況について					
Q1 授業の復習や自己学習などの事前学習を行って試験に臨んだ	24 (45.3)	29 (54.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q2 OSCEに向けて教員に技術指導やアドバイスを求めた	11 (20.8)	22 (41.5)	18 (34.0)	2 (3.8)	53 (100.0)

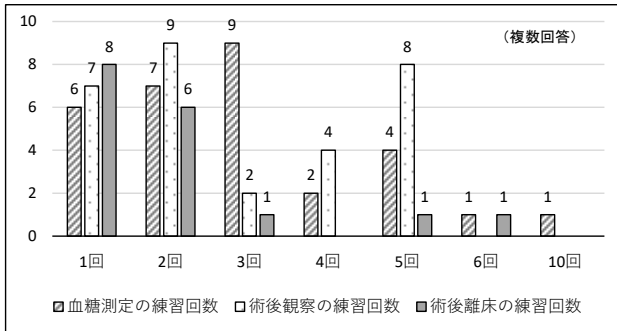


図1 各技術項目の練習回数

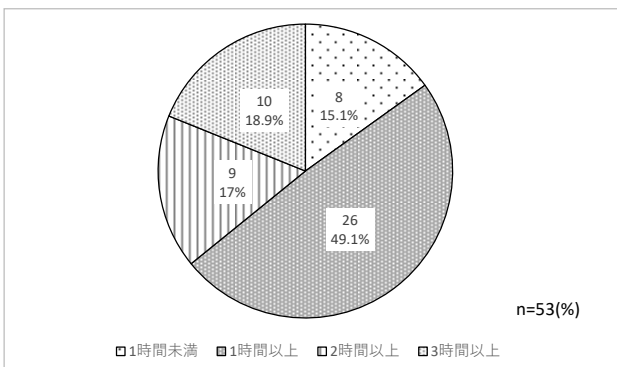


図2 OSCE受験のための練習時間

2) OSCEを受ける姿勢について

OSCEを受ける姿勢について、「身だしなみを整えることができた」は「非常に当てはまる」48名 (90.6%)、「かなり当てはまる」5名 (9.4%) であった。「真剣な態度で取り組むことができた」は「非常に当てはまる」43名 (81.1%)、「かなり当てはまる」10名 (18.9%) であり、学生は身だしなみを整え、真剣な態度で試験に取り組んでいた (表2)。

3) OSCE受験について (表3)

「OSCEを受験することの緊張」は「非常に当ては

まる」40名 (75.5%) で最も多く、「かなり当てはまる」10名 (18.9%)、「あまり当てはまらない」3名 (5.7%) であった。

「該当した技術を正確に行うこと」は「非常に当てはまる」9名 (17.0%)、「かなり当てはまる」32名 (60.4%) で、「患者の安全・安楽に考慮することができた」は「非常に当てはまる」16名 (30.2%)、「かなり当てはまる」27名 (50.9%) であり、75%以上の学生が患者の安全・安楽を考慮しながら正確な技術が実施できたと認識していた。

「患者が理解しやすい言葉で説明ができた」は「非常に当てはまる」14名 (26.4%)、「かなり当てはまる」33名 (62.3%) で、「患者に援助について説明し、同意を得ることができた」は「非常に当てはまる」16名 (30.2%)、「かなり当てはまる」27名 (50.9%) であり、80%以上の学生が患者への分かりやすい説明と同意を得ることを意識していた。

「OSCEの課題は難しかった」については「非常に当てはまる」8名 (15.1%)、「かなり当てはまる」33名 (62.3%) であり、75%以上の学生が状況設定の課題に難しさを感じていた。「試験時間は適切だった」は「非常に当てはまる」23名 (43.4%)、「かなり当てはまる」17名 (32.1%)、「あまり当てはまらない」11名 (20.8%)、「ほとんど当てはまらない」2名 (3.8%) であり、75%の学生は実施時間が適当と感じていたが、25%の学生は不適当と感じていた。

「教員からのフィードバックは参考になった」は「非常に当てはまる」42名 (79.2%)、「かなり当てはまる」11名 (20.8%) であり、全員が教員からのフィードバックの効果を感じていた。

表2 OSCEを受ける姿勢について

n=53 (%)

項 目	非常に 当てはまる	かなり 当てはまる	あまり当て はまらない	ほとんど当て はまらない	計
●OSCEを受ける姿勢について					
Q1 身だしなみを整えることができた	48 (90.6)	5 (9.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q2 真剣な態度で取り組むことができた	43 (81.1)	10 (18.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)

表3 OSCEの受験について

n=53 (%)

項 目	非常に 当てはまる	かなり 当てはまる	あまり当て はまらない	ほとんど当て はまらない	計
●OSCEの受験について					
Q1 OSCEの受験は緊張した	40 (75.5)	10 (18.9)	3 (5.7)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q2 該当した技術を正確に行うことができた	9 (17.0)	32 (60.4)	11 (20.8)	1 (1.9)	53 (100.0)
Q3 患者の安全・安楽に考慮することができた	16 (30.2)	27 (50.9)	10 (18.9)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q4 患者が理解しやすい言葉で説明ができた	14 (26.4)	33 (62.3)	6 (11.3)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q5 患者さんに援助について説明し、同意を得ることができた	16 (30.2)	27 (50.9)	9 (17.0)	1 (1.9)	53 (100.0)
Q6 OSCEの課題は難しかった	8 (15.1)	33 (62.3)	12 (22.6)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q7 試験時間は適切だった	23 (43.4)	17 (32.1)	11 (20.8)	2 (3.8)	53 (100.0)
Q8 教員からのフィードバックは参考になった	42 (79.2)	11 (20.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q9 OSCEを受けて自己の課題が見つかった	39 (73.6)	14 (26.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q10 OSCEを受けたことは今後の学習や実習に役立ちそうだ	41 (77.4)	12 (22.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q11 OSCEの目標を達成できた	17 (32.1)	32 (60.4)	4 (7.5)	0 (0.0)	53 (100.0)

「OSCEを受けて自己の課題が見つかった」は「非常に当てはまる」39名(73.6%)、「かなり当てはまる」14名(26.4%)で、「OSCEを受けたことは今後の学習や実習に役立ちそうだ」は「非常に当てはまる」41名(77.4%)、「かなり当てはまる」12名(22.6%)であり、全員が受験後の自己課題に気づき、今後の学習や実習への有用性を感じていた。

2. OSCEを振り返って、考えたこと、思ったこと

自由記述の内容を分析した結果、コード数53、サブカテゴリ21、カテゴリ5つが抽出された。以下【 】内をカテゴリ、『 』内をサブカテゴリをとする。分析結果を表4に示す。

【自己の課題の明確化】は、学生がOSCEを体験し自己の気づきや教員によるフィードバックによって自己の課題が明確になったことである。【看護技術の修得と学習意欲の向上】は、OSCE受験と教員の評価・助言によって学生の学習に対する意欲と状況に即した看護技術修得に対する意欲が向上したことである。【状況に即した看護実践の難しさ】は、学生が事例患者の状況設定に対応した看護実践や時間的制約のなかでの看護実践に難しさを実感したことである。【事前練習および受験の成果】は、学生が事前練習やOSCE受験により自己の技術力の向上や知識の確認といった成果を感じたことである。【臨地実習における看護実践の有用性】は、学生が臨地を想定した状況下での看護実践が今後の実習に活かそうだと認識したことである。

考 察

1. 成人看護学演習におけるOSCEの現状

OSCEの取り組み状況については、学生全員が授業の復習や自己学習などの事前学習と事前の技術練習を行ってOSCEに臨んでいた。そのうち60%の学生が自ら教員に技術指導やアドバイスを求めて練習をしており、OSCEに向けて前向きに取り組んでいることが窺えた。また、OSCEでの実践を振り返って、事前の十分な技術練習による自己の技術力の向上、試験や事前練習は自分自身のためになるといった【事前学習および受験の成果】を感じていた。このようなOSCEに向けた主体的な学習や看護技術の練習といった成果は、先行研究と同様であった⁶⁾。また、すべての学生が身だしなみを整え、真剣な態度でOSCEに臨むことができていた。OSCEは精神運動領域だけでなく、態度・習慣などの情意領域を評価し、学生の能力を査定する方法である³⁾。また、臨床場面に近い状況で行うため、OSCEを通して看護者としての姿勢を育むことにつながったといえる。

OSCE受験については、全員がOSCE後に自己の課題の明確化や参考になる教員のフィードバックが今後の学習に役立つと感じていた。多賀ら⁵⁾は、学生にとってOSCEを受けたことは、学びの機会として肯定的に受け止め、自己の技術を振り返る経験となり、新たな自己の課題を見出す機会になると述べている。OSCE受験後の自由記載でも【自己の課題の明確化】、【看護技術の修得と学習意欲の向上】が明らかになり、OSCE受験は学びの機会とともに今後の学習への動機づけになったといえる。園田ら¹²⁾はOSCE受験後のフィードバックは、肯定的フィードバックのみ

表4 OSCEを振り返って考えたこと、思ったこと

カテゴリ	サブカテゴリ	コード化
自己課題の明確化	受験とフィードバックによる新たな課題の気づき	教員のフィードバックによる自己の課題の気づきや振り返りができた
		教員のフィードバックによって自己の課題を学ぶことができた
		教員の的確な助言による自己の課題が明確になった
		受験によって自己の課題に気づいた
		限られた時間内でケアをするための自己の課題が発見できた
		自己の技術と課題が明確になった
		教員の客観的評価により看護技術の明確な改善点の発見できた
	的確なフィードバックが参考になる	フィードバックがとても参考になった
		教員の助言がとても参考になった
		教員からの的確な助言が参考になった
	フィードバックの良さを実感	教員からのフィードバックが自分の為になった
		教員から直ぐにフィードバックを受けることの良さ
	アセスメントの重要性に気づく	アセスメントによって必要な看護ケアを導き出すことが自己の課題 優先順位を判断して看護を行うことが重要である
	実施後のリフレクションの必要性を自覚する	時間内に終了できなかったことで観察項目や手技を見直す必要があると思った 時間不足であったため自分の技術を振り返る必要がある
	看護技術力を獲得する必要性を自覚する	臨地で役立つために技術を身につけないといけない
	練習不足を自覚する	もっと練習しておくべきだった
	即時の判断や臨機応変な対応に向けて学習の必要性を自覚する	臨機応変な対応に向けての学習の必要性を感じた 瞬時に判断しての実施することが不十分で、復習が必要である
看護技術の修得と学習意欲の向上	教員からの評価やポジティブな助言による学習や実習に対する意欲の向上	実施後の教員からの評価や助言が記憶に残りやすく、学習の向上につながる 褒められることや実習を想起させる助言で、実習を頑張ろうと思った
		教員の客観的評価により看護技術の手技獲得の自信になった
	看護技術の修得に対する自信	もっと経験を積んで完璧にできるようになりたい 状況に対応した看護技術が実施できず、もう一度行いたい 臨機応変に対応できなかったため、臨機応変に対応する能力を身につけたいと思った
		状況によって何から実施したらよいのか、優先順位の判断が難しい 技術の観察項目や手技は分かっているが、状況判断と看護ケアが浮かばない 思っていた試験内容と異なり戸惑った
状況に即した看護実践の難しさ	状況に即した看護実践が難しい	時間制限により一連のケアの中の必要な看護の一部分が出来なかった 時間制限により看護が満足にできなかった 練習通りの技術では時間内に終わらなかった
		試験に向けて時間をかけて練習したため実習で手技を十分に発揮できた 練習場所の確保によって練習が取り組みやすかった 試験前の練習で技術を高めることができた
	試験や事前練習は自分自身のためになる	試験直前の事例（課題）提示に対して緊張したが、事前に練習をして挑むことで落ち着いて受験できた 試験のための技術練習が結果的に自分の為になっている 合格のために一生懸命練習するので試験は行うべきだと思った
		状況設定の試験によって自己の知識を確認できる 事例設定を試験直前に知る試験により知識が身につけていることを確認できた
事前練習および受験の成果	十分な技術練習による技術力の向上	緊張感を持って、臨地と同一ような状況の試験を受けることは、技術向上に繋がると思った
		看護技術を試して評価をうけることは、良い取り組みだと思った
	試験や事前練習は自分自身のためになる	臨床で実施するのと同じくらいの緊張感を持って臨めた 実際の場面を想定することで、緊張感をもって実施できた 実際の場面を想定することで、臨地での実践を意識した 緊張したが良い経験になった 事例設定（課題）が試験開始までわからないことで、より実践的に行えた
		臨地で使える技術と内容であり、実習のための練習になった
		実習に向けて役に立つ内容だった
		臨地での実践につながるの、しっかり取り組めた
	臨地実習に向けて役立つ技術の実施	実習で行うかもしれない技術を実習前に練習できることは嬉しいことだと思えた
		反省を実習に活かしていこうと思った
		実習に活かそうだ
		実習に活かすことが出来そうだ
臨地実習における看護実践の有用性	看護実践を実習に活用できそうだと認識	試験に向けて時間をかけて練習したため実習で手技を十分に発揮できた 練習場所の確保によって練習が取り組みやすかった 試験前の練習で技術を高めることができた
		試験直前の事例（課題）提示に対して緊張したが、事前に練習をして挑むことで落ち着いて受験できた 試験のための技術練習が結果的に自分の為になっている 合格のために一生懸命練習するので試験は行うべきだと思った
	状況設定の試験によって自己の知識を確認できる	事例設定を試験直前に知る試験により知識が身につけていることを確認できた
		緊張感を持って、臨地と同一ような状況の試験を受けることは、技術向上に繋がると思った

ならず、「できていない」ことに対する建設的フィードバックによって学生は必要な能力を現時点でどこまで習得できているかを確認できると述べている。本研究結果において、OSCE終了後の教員のフィードバックにより、アセスメントや技術力、対応力など具体的に自己の課題を見出していた。フィードバ

ックを行う教員は、学生が自己の知識や技術の習得レベルの確認や、今後の学習への動機付けにつながるよう具体的なフィードバックを行う必要があるといえる。

また、OSCE受験については90%以上の学生が緊張したと回答しており、自由記載では『臨地を想定

することで緊張感を持った実践』であった。そして、OSCEを『臨地実習に向けて役立つ技術の実施』で、『看護実践を実習に活用できそうだと認識』しており、全員がOSCE受験による今後の【臨地実習における看護実践の有用性】を感じていた。このことから3年次の成人看護学演習において、臨地実習開始前の時期にOSCEを実施することは適しているといえる。

一方、OSCEでは試験直前にOSCE課題文を提示したが、学生の75%が課題の難しさを感じ、試験時間は約25%の学生が適切でなかったと感じていた。OSCE受験後の自由記載においても『時間制限により一連の流れの中で必要な全ての看護ができなかった』ことや『状況に即した看護実践が難しい』と感じており、学生は設定された時間の中で【状況に即した看護実践の難しさ】を感じていた。学内演習では、事例に対する援助の必要性をアセスメントして計画を立案し、看護技術の選択や実践方法などを十分に検討した後に看護実践を行う。事例患者に合った安全で安楽な看護実践に重きを置くため、学生が事例患者の看護に要する時間を意識しながら実践することは少ない。そのため受験後の振り返りの中で、時間制限があって必要な看護を十分できなかった、練習通りの技術では時間内に終わらなかったという感想を持ったと考えられる。その一方で、時間不足であったため自分の技術を振り返る必要があるといった『実施後のリフレクションの必要性』や、優先順位を判断して看護を行うことの重要性、『即時の判断や臨機応変な対応に向けての学習の必要性を自覚』していた。そして、OSCE受験を振り返り、臨機応変な対応ができなかったことで『状況に即した看護技術の修得に対する意欲』を示していた。このように学生が状況に即した看護実践力の必要性を自覚したのは、OSCE課題を臨地に近い状況設定にしたためと考えられる。笹本ら⁸⁾は臨場感がある中での看護技術の提供や模擬患者との間で生じる相互作用を通して、認識領域（知識）のみならず、精神運動領域（技術）と情意領域（態度・感情）を統合した看護実践が意識づけられることで、より実践的な看護を学ぶ機会になると述べている。3年次の各論実習前の看護学演習では、臨地実習に向けて看護実践力を強化することが求められる。よって、成人看護学演習においては、より臨床に近い状況設定での看護実践が行えるようシミュレーション教育の内容を吟味する

必要がある。

2. 成人看護学演習におけるOSCEの課題

成人看護学演習におけるOSCEで、学生は制限時間内に看護実践を行うことを困難に感じていた。成人看護学演習では臨地実習に向けて看護実践力を強化することが求められるため、OSCEの課題は臨地実習で学生が経験する状況設定とし、7分以内で実施できる内容とした。実施時間が不足した要因としては、時間制限により一連のケアの中の必要な看護の一部分ができなかった、練習通りの技術では時間内に終わらなかったというように、必要な看護を全て確実に実践しようとする思いが時間を考慮しない実践になったことや、事前練習においても時間を気にせずに実施していたことが推察される。OSCE実施に際しては、成人看護学演習の初回時とOSCE実施の1週間前に、OSCEのオリエンテーションを実施した。しかし、学生が時間内に看護実践することをイメージできていなかったことから、オリエンテーションの内容と方法を再考し、学生のOSCEに対する理解を深めることが必要と考える。また、成人看護学演習における看護実践力の評価としてOSCEを行っているため、成人看護学演習においても学生が事例患者の援助に要する時間を意識しながら実践できるよう実施時間を明確にし、臨地に即した観察や援助を実践できるような状況設定にするなど、演習内容を精練し、演習後に学生が反復して練習できる時間と環境を整える必要がある。

また、効果的にOSCEを実施するためには教員による適切な指導・評価、適切なフィードバックが求められる¹⁷⁾、今回の結果では、教員のフィードバックが学生の振り返りや自己の課題の明確化につながっていることが明らかとなった。教員からのフィードバックの内容は、評価項目を視野に入れながら挨拶・自己紹介などの基本的な介入、コミュニケーション技術、看護技術の正確さなど多岐に及ぶ。今回はOSCE実施直後に3分間フィードバックの時間を設け、OSCE実施直後に具体的なフィードバックを行う効果は得られたと思われるが、教員が気づいた内容のすべてを時間内に伝えることは難しい。よって学生の今後の成長や学習意欲につながるようなフィードバックにするには、フィードバックの時間を確保することや、個別のフィードバックに加えて全体でのフィードバックを行うなど、フィードバックの

方法も検討する必要がある。

今回は成人看護学演習後にOSCEを受験した3年次生を対象として質問紙調査を行い、成人看護学演習におけるOSCEの評価を行った。今後はOSCEに携わった教員の評価も合わせた検討を行い、OSCEの効果的な運営と教育内容の充実を図っていきたい。

結 論

成人看護学演習におけるOSCE受験した学生は、事前に自己学習、技術練習を行って受験に臨み、事前練習と受験による成果を自覚していた。学生のOSCE受験後の認識は【自己課題の明確化】【看護技術の修得と学習意欲の向上】【状況に即した看護実践の難しさ】【事前練習および受験の成果】【臨地実習における看護実践の有用性】の5つであった。今後のOSCEの課題は、学生のOSCEに対する理解を深めること、十分なフィードバックの時間を確保すること、教員評価と合わせたOSCE評価の検討である。そして成人看護学演習において、看護実践能力の強化に向けて臨地に近い状況を設定し、学生が時間を意識できるようシミュレーション教育の内容を充実することの必要性が示唆された。

本研究の限界

本研究の対象者は1施設のみの学生で、成人看護学演習後にOSCEを受けた3年次生のうち研究に協力した学生であることから、本研究で得られた結果は限定され一般化することはできない。

利益相反の開示

本研究において、開示すべき利益相反は存在しない。

謝 辞

本研究にあたり、調査にご協力いただいた研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は令和4年度福岡県立大学附属研究所研究奨励交付金（若手奨励研究）の助成を受けて実施した。

引用文献

1) 厚生労働省. 看護基礎教育検討会報告書(2019).
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2022年5月5日検索)

2) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告書 (2011).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kooutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf (2022年5月18日検索)

3) 伴信太郎. 客観的能力試験－臨床能力の新しい評価法－. 医学教育 1995 ; 6(3) : 157-163.

4) 安井大輔, 小澤知子, 濱田麻由美, 他. 術後早期離床ケア OSCEのふりかえりをとおしての学生の学びと気づき. 東京医療保健大学紀要 2014 ; 9(1) : 23-30.

5) 多賀昌江, 樋之津淳子, 福島眞理, 他. 学生から見た客観的臨床能力試験 (OSCE) トライアルの意義. 札幌市立大学研究論文集 2009 ; 3(1) : 27-34.

6) 高島利, 荒尾博美. 看護系大学生を対象とした客観的臨床能力試験 (OSCE) の現状に関する文献レビュー. 熊本保健科学大学研究誌 2021 ; 18 : 43-56.

7) 小西美里. 日本の看護教育におけるOSCEの現状と課題に関する文献レビュー. 上武大学看護学部紀要 2013 ; 8(1) : 1-8.

8) 笹本美佐, 小園由味恵, 奥村ゆかり, 他. 実習前OSCEを通して看護学生が実感した学習効果. 日本赤十字広島看護大学紀要 2012 ; 12 : 79-87.

9) 大森眞澄, 矢田昭子, 三瓶まり, 他. 試行的実践から明らかとなった看護学生に対するOSCEの意義と課題. 島根大学医学部紀要 2011 ; 34 : 9-64.

10) 三味祥子, 吉田和美, 山本加奈子, 他. 2年次看護学生が基礎看護学実習前のOSCEをとおして臨地実習で実感したOSCEの学習効果. 日本赤十字広島看護大学紀要 2016 ; 16 : 89-97.

11) 鈴木美代子, 井上都之, 高橋有里, 他. 4年次の看護技術統合演習に客観的臨床能力試験 (OSCE) を導入した教育効果. 岩手県立大学看護学部紀要 2018 ; 20 : 39-52.

12) 園田裕子, 吉田理恵, 前田陽子, 他. 客観的臨床能力試験 (OSCE) における形成的評価を高めるフィードバックのあり方とその課題. 日本赤十字北海道看護大学紀要 2017 ; 17 : 9-17.

13) 中島明美, 雑賀美智子, 猪股久美, 他. 初年度OSCEにおける学生の到達度評価と今後の課題. 帝京平成大学紀要 2018 ; 29 : 63-74.

- 14) 吉田理恵，園田裕子，前田陽子，他．本学における2年次客観的臨床能力試験（OSCE）前の演習の展開とその課題．日本赤十字北海道看護大学紀要 2018；18：5-21.
- 15) 北川公子，櫻井美奈，菱刈美和子，他．本学看護学部における3年次OSCEの実施と今後の課題．共立女子大学看護学雑誌 2016；3：62-69.
- 16) 藤井瑞恵，進藤ゆかり，内田雅子，他．看護OSCE受験生の心理的反応および学習意欲の関係と課題－学生アンケート調査を通して－．第42回日本看護学会論文集 看護教育 2012：10-13.
- 17) 中村恵子．看護教育における効果的なOSCEの実施．看護教育 2019；60(9)：722.
- 受付 2023. 9. 27
採用 2023. 11. 8